

第1章 開幕

少しのあいだ、真冬の森を散策している自分を想像してほしい。柔らかな地面を心地よく踏みしめながら歩いていると、ふと、何かが目にとまった。人がよく通る小道から少しはずれた窪地に、どこか場違いな、なんだか不自然なものを感じたのだ。森にはイヌの散歩に来ている（物語のはじまりとして、おなじみの場面だろう）。そのとき、イヌが急に走り出したかと思うと藪の中に潜り込み、クンクン臭いを嗅ぎはじめたではないか。大あわてであとを追い、イバラをかき分け、かき分け、ようやくイヌのいる場所にたどり着いたとき、胸騒ぎはさらに大きくなった……そして窪地を見下ろした瞬間、その理由をはっきりと思い知る。イヌが夢中で土を掘り返している目の前の地面から突き出しているのは……生気のない人間の手……黒々とした土を背景に、青白い手がくつきりと浮かび上がっていた。

こうした犯罪で、目撃者の証言または被疑者の自白以外に犯人を突き止める方法がなかった時代は、

それほど遠い昔ではない。犠牲者の身元や参考人とのつながりを示す手がかりが何もなく、ぞんざいに埋められていた死体が永遠に謎に包まれたままで終わった事件が記憶にある人もいるだろう。だが時代は進み、今や科学捜査の進歩は加速度を増すばかりだ。

指紋については誰もがよく知っていて、先史時代の土器にも見つかった。古代中国およびアッシリアの人々は指紋を用いて粘土工芸品の所有権を示し、のちには文書の持ち主を明らかにしていた。一八五八年には英国のインド行政官だったウィリアム・ハーシェル卿が、契約書には署名とともに指紋も加えるべきだと主張した。指紋分析の方法は十九世紀の後半までに確立され、一八八二年にはフランスのアルフォンス・ベルティヨンが人間一人ひとりの違いに関する学術的研究の一環として、日常的に指紋をカードに記録した。さらに一八九一年までにアルゼンチンの警察が犯罪者の指紋採取を開始している。この分野は急速に発展し、一九一一年、個人を特定する信頼できる方法として米国の法廷で指紋法が認められるようになった。時代を早送りすると、一九八〇年には英米両国ではじめてコンピューター化された指紋データベース、NAFIS（全国自動指紋識別システム）が確立された。一九九〇年代になると科学捜査はさらにめざましい発展をとげ、DNA型鑑定法が生まれた。それまでの指紋と同様に一人ひとりの異なった痕跡をとらえることができるが、今度は血液、精液、体細胞、または毛根を試料として用いる。この技術の開発によって科学捜査の世界は大きな変貌をとげ、冒頭の冬の森で見つかった死体のような身元不明の犠牲者がどこの誰かを突き止めたり、事件現場と特定の人物とを結びつけたりすることが、はるかに容易になったのだ。間違いなく、これら二つの技術は科学捜査の歴史上で途方もなく重要なものだ。こうした技術がなければ野放しになっていた

かもしれない殺人犯が、その進歩のおかげで刑務所に送られてきた。そのままにすれば同じ罪を繰り返したかもしれない婦女暴行犯が逮捕され、有罪判決を受けている。一步間違えれば不当に告発されていたかもしれない人も、無実の罪を晴らしてきた。その途上でさまざまな後戻りを経験しながらも、犯罪捜査は一步ずつ、真実へと近づいてきたわけだ。

ただし事件現場では必ず指紋が見つかるというわけではなく、なかでも犯人が科学捜査の可能性を考えて手袋をしたり、証拠を残さないように注意しながら立ち去ったりすれば、なおさら指紋の発見は難しくなる。DNAの証拠も同様で、多くの人が思っているほど全能でもなければ、必ず発見できるものでもない。事件現場に犯人の痕跡がまったく残されておらず、毛髪も血液も精液も、そのほかのどんな体液も組織も採取できなかったために、加害者の遺伝子分析など不可能なこともある。

でも……人と場所とを結びつけ、無実の人の潔白を証明し、誰かの有罪を指摘できるような、また別の方法があったらどうだろう？ 指紋とDNAによる証拠に加えて、事件のある一面を裏づけられる別の痕跡が残されているとしたら？ しかも、あまりにも広く残されているために、犯人がどれだけ科学捜査の方法に詳しくても、けっして取り除くことができないものとしたら？

もう一度、冒頭に登場した冬の森の事件現場に戻って、その場面を想像してみよう。イヌが盛んに土を掘り返している場所に近づこうとして、行く手に立ちはだかるイバラ、頭上から垂れた木の枝をかき分けながら進めば、知らず知らずのうちに上着の袖がオークの幹に触れるだろう。そのとき、樹皮の窪みに埋まっていた目に見えないほど微細な胞子と花粉が袖に付着する。さらに斜面をすべるように下りていくと、履いている靴はあたりの土や泥で汚れる。そうした汚れには周辺の樹林から地面

に降り注いだ花粉と胞子が、最近のものだけでなく過ぎた季節に落ちたものも含めて、閉じ込められている。その場の土の中で暮らしている数多くの生き物や、かつてそこで暮らしたものの死骸のかけらも、いっしょに靴につくだろう。

目に入ったものをもっと詳しく見ようとして身をかがめれば、死体の上に張り出している枝と葉に髪が触れて、その表面に降り積もっていた花粉、胞子、そのほかの微細な物質を集めることになる。自分がその場所に残した痕跡——土を踏んだときの足跡、落とした髪の毛や衣服の繊維など——は、すぐ目立たなくなってしまうかもしれない。あるいは見過ごされてしまうかもしれない。でもその逆に、場所のほうがあなたに刻みつけた痕跡はどうだろう？ 顕微鏡でしか見えないこうしたわずかな痕跡を誰かが回収して確かめ、体や衣服に残された痕跡から自分がいた場所を、あるいはもつとずつと遠く離れた別の場所を、目に浮かぶように再現できるとしたら？

さて、自分が殺人犯だと想像してみてもほしい。手にかけて相手を遺棄してきた場所は、いったいどんな痕跡をあなたに残し、そしてあなたはどんな痕跡を、それとは知らずに行く先々へと持ち歩くのだろうか？

そこで私の出番だ。私自身の生きてきた道と犯罪科学捜査の歴史とが、ここでピタッと噛み合う。一九九四年、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの環境考古学者だった私に、一大転機が訪れた。私が正式に植物の世界の研究をはじめたのは五十年近く前の話だが、実際のところ、私が自然界に夢中になったのはそれよりはるか昔のことだった。子どものころから、自然界について書いた本をどれだけ読んでも、いつももつと知りたいと思った。知りたいことはつねに大量にあつて、それは今でも変わらない。いつまでたつても頂上にたどり着けないのは、もどかしいことではある。でも、たどり着ける者は誰一人としていない。登り道は険しく、永遠に続く。

私は仕事に費やした時間の大半を顕微鏡の前で過ごしてきた。没頭したのは、次から次へと異なる試料を調べながら、花粉と胞子の混じり合ったものの正体を見極める作業だ。微細な花粉粒と菌類（真菌類）の胞子を含んだ試料をまず赤く染色してからゼリーに埋め込み、さらにスライドグラス上に薄く広げて顕微鏡にセットする。何も知らない人が覗いたなら、ただ形の異なる染みと斑点が混じり合った寄せ集めにしか見えないかもしれない。だが、花粉と胞子を研究している花粉学者にとって、それらは多様で幅広い自然界から拾い上げた要素の集まりだ。

高倍率の顕微鏡のレンズを通して花粉粒を見たとき、目の前に現れた極小世界の不思議で複雑な美しさに、思わず感嘆の声を上げない人はほとんどいない。小さい孔がいくつも並んだ球形の花粉粒もあれば、ダンベルに似た形の花粉の表面に、細い切れ目がグラデーションになってついているものもある。表面の孔や溝は大きさや形がさまざまに異なり、種類も組み合わせも変化に富んでいるし、花粉粒の外壁にも、全体を覆っている渦状の複雑な隆起、縞模様や皺、網目模様^{レチクル}に並んだ小さな柱などが見える。ごく単純な塊があるかと思うと、その塊にびっしりとトゲが並んでいたりと、そのトゲにまたトゲがついていたりする。形状と凹凸の単純さや複雑さを見て、私たちは針葉樹の雄花または顕花植物の葯^{やく}が生み出したこれらの小さな粒を識別し、分類することができる。

種の存続に欠かすことのできないこれら極小の、たいていはとても美しいかけらを目にすれば、誰もがぎつと驚くだろう。うっとりして、夢見がちな空想をめぐらすかもしれない。だが、ロマンチス

トである夫がいつも残念がっていることに、私はかなり実利的かつ現実的だ。目に入ったものを「あるがままに見ること」を誇りとし、見るものの解釈にいかなる認知バイアスも入り込ませないようにしている。私にとつての花粉粒は、職業柄、単に植物や菌類の生活環における一段階ではないからだ。それらは、私が警察の仕事の一環として解明していく物語の基盤になる。ある人物が自分はそのようにたと主張した場所に実際はいなかったことを教えてくれる、まぎれもない「標識」になる。相手が嘘をついている、または真実をねじ曲げていることを伝える「ささやき声」にもなる。誰が、何を、どこで、どのようにして、という筋の通った説明をするための、縦横の織り糸になるのだ。犯罪が起きたあと、私は収集された花粉粒、菌類、地衣類、微生物が物語っている可能性を読み取ってまとめ上げ、自然界が教えてくれる事実のかけらをつなぎあわせて、全貌を明らかにしようとして力を尽くす。

私はこれまで自分のことを「パズルを解くプロ」だと説明しており、この喩えはなかなか射ていると思う。この仕事では正確さがとても重要になるわけだが、花粉粒や胞子をそれぞれ見分けて確認するのは、時としてひどく骨の折れる仕事だ。つねに正確であることを目指し、少しでもあやふやな部分があれば、正しく同定されている植物の標準物質を利用することが必要不可欠になる。もし間違えば、不当に誰かの自由を奪ったり誰かに自由を与えたりしてしまうかもしれない。私は花粉の一粒一粒を区別しようと悪戦苦闘しながら、人生の長い時間を極小の世界の研究に費やしてきた。それは、「単純」とはかけ離れた作業なのだ。

バラ科のように古くからある科の植物の場合、花粉粒には必ず三つの溝と三つの孔がついていて、表面に筋状の渦巻き模様が見える。一つの種の模様が少しだけ変化したものが別の種の模様になって

いることもあるから、イバラ、バラ、サンザシの花粉を確実に見分けるのは難しい。一方これらは、スピノサスモモ、プラム、チェリーを含むグループとは簡単に見分けがつく。このグループの場合は筋状の渦巻き模様が、よりはっきりしていて見えやすい。それでも犯行現場がチェリーの果樹園だったとして、顕微鏡で覗いている花粉が確実にチェリーの木のものと断言することはできないだろう。チェリーと、たとえばスピノサスモモとを区別する差異は、ほとんどないからだ。コケのような「下等」植物の胞子の場合には、それぞれを見分けられる決定的な特徴はさらに少ない。コケよりあとに進化したシダなどの植物なら、区別できる特徴はコケよりも多いが、針葉樹よりは少ない。同様に、針葉樹の花粉の特徴は顕花植物のものより少ない。これはほとんど無限の可能性を含んだややこしい世界だが、それでも私たちはなんとかして解決法を見出さなければならぬ。

今、この本を読んでいる人は、おそらく私と同じ仕事をしている人物に出会ったことはないと思う。いや、おそらくそんな職業の話も聞いたこともないだろう。四十年前には、この仕事は存在しなかった。世界のほとんどの国では今もまだ存在していない。私はときに別の名前と呼ばれることもあるが（思い浮かぶあだ名の一つは、死体の鼻腔から花粉粒を入手する手法を私が開発したことで生まれた「スノットレディー（鼻クソ女史）」）、自分のことを何よりもまず「法生化学者」だと思っている。犯罪を解決する刑事の仕事を手助けするために、自然界のさまざまな特徴を活用して分析する専門家だ。林間の浅い穴に埋められた死体、郊外の家の石炭庫でミイラ化した死体、あるいは沼沢地の川から引き上げられた死体が見つかる、私は現場で自然環境を丹念に調べ、それぞれの運命の日に何が起こったかの手がかりをつかむよう求められる。一方、犯人が殺人を自白したのに死体が見つからない

場合には、犯人の衣服、靴、持ち物、車に自然界が残した痕跡を確認し、被害者が埋められている場所、あるいはほとんど隠そうとした跡もなくなったぞんざいに捨てられている場所を割り出すのが、私の任務だ。さらに暴力事件や性的暴行事件が起きれば、花粉、菌類の胞子、土、微生物といった自然のまぎれもない痕跡を丹念に調べ、被害者または容疑者が実際にいた場所を特定することで、無罪か有罪かを判断する道筋をつけるよう依頼される。容疑者が有罪かどうかを見極める警察の活動を助けるために動植物の科学を利用しようと考えたのは、私をはじめではないが、一九九四年の忘れられないある一日から、それが私の一生の仕事になった。私はここ英国の地で、この分野を先導しながらさらに新しい方向へと拡大させるとともに、後輩のために最良の実践法となるようなプロトコル作りに励んでいる。

これが私の守備範囲だ。私は犯罪と自然界が影響し合う境界上で仕事をしている。

テレビでは犯罪をテーマにした番組が飽き飽きするほど放送されているから、たくさんの人が死に強い興味を抱き、かなりの知識をもっているように思える。そういう人たちは画面に映るニセモノの死体を何百回も目にして、人間の死骸を見るということに鈍感になっていくかもしれない。だが実際には人間の死と定期的に関わっても感覚が鈍ることはけっしてなく、多くのテレビ番組はただ取るに足りない、軽薄な、いろいろな点で不正確なものに思える。

私の考えでは、多くの人は死について頭の中でおかしな仮定をしている。すべての人の魂は永遠で、長い旅を続けており、死はそのあいだの一つの中継地点にすぎない、というものだ。でも私は、そうは思わない。それほど遠い昔ではない時代、私がまだよく覚えている、教会に通っていた子どもだっ

た時代には、「私たちの体はただの無機物とエネルギーと水の集まりでしかない」という大いなる真実を受け入れるために、人々はこう信じざるを得なかったのだ。だが、すべてが終わりを迎えると、生命力であるエネルギーが流れを止め、私たちそのものである心と記憶の入れ物だった体は、それぞれの部分を構成していた物質に分解し、散り散りになって、自然の元素を混ぜ合わせる巨大な器に戻っていく。生きとし生けるものは、その巨大な器の中から姿を現したのだ。自分の体と心を形作っている構成要素、つまり自分が自分自身だと考えている基本的なものが、かつては別のものの一部だったこと、自分が死ぬとそれらはまた別のものに利用されるということを、ほとんどの人は認めたらがないし、考えたことさえないかもしれない。でも私はそう考えても落ち込んだり不安になったりしない。私にとって、それはリサイクルの極致、すなわち生まれ変わりの極みであり、宗教を信じているのと同じかかわらず誰にでも起こることだ。人によっては冷たく無常に思えるかもしれないけれど、それが自然というものであり、裏づけの不可能な架空の来世の物語よりも美しいと思う。

ただ一つの来世は、自分自身の死によって世界に放たれた体の構成要素から作り出されるもので、それらは何度でも何度でも、繰り返し利用可能だ。自分の体は噴水で、貯水池から吸い上げた水を吹き上げていくと考えるとほしい。水は一定のパターンを描きながら噴出しており、そのパターンを保つのは吹き出し口の圧力と形状だ。吹き上げる噴水の姿は自分の体、つまり人生そのものだ。だが圧力をかけるのをやめれば水は上がらなくなって、貯水池に戻ってしまう。噴水の水は私たちが消費する食物や飲み物にあたり、私たちにエネルギーと姿形を与えてくれる。噴水の姿は一時的なものにすぎず、ほんの数秒のあいだ華やかな滝のように流れたあと、渦を巻いたり滴り落ちたりしながら、必ず

また貯水池に戻っていく。吹き出し口が変われば、噴水の姿も変わり、異なる「人生」が形成される。私たちの体は噴水の形状に似て、エネルギーと材料が流れ込み、また流れ出していく。私たちを作り上げている「水」は、必ず貯水池に戻る。

いや、来世と呼べるものはない。そのかわりに、死の中にもつねに生命がある。人が生きているあいだ、その体は美しく均整のとれた生態系の塊だが、死体でもそれは同じことだ。人の死体は微生物にとって豊かな活気あるパラダイスとなり、腐敗物をあさる昆虫、鳥、ネズミなどの動物にとっての恵みで、そうした生き物たちは死体を食べに集まってくる。さらに一部は、「ゴールドラッシュ」を利用して集まってきた修理屋や商人のように、腐敗物をあさる生き物を食べるために集まる。これも法生態学者にとっては重要だ。死体がどのように分解されているか、腐敗物をあさるどんな種類の生き物が集まっているか、どれだけの速度で分解されているかも、誰が、何を、どこで、どのように、というパズルを解くために不可欠なピースにはほかならない。ウジ、シテムシ、ニクバエ、カリバチ、ネズミ、カラスなどの腐肉食の鳥類、キツネにアナグマ、ミミズ、ナメクジ、カタツムリなど、すべてが私の仕事を描く物語の中でそれぞれの役をもっている。

そろそろ先に進まなければならぬ。だがはじめに、これから出かける旅について断っておきたいことがある。

この本は単なる回想録ではない。一人の人生の体験はあまりにも膨大かつ複雑で、一冊の本にはとうてい収まりきらないからだ。またこの本は、どうすれば法生態学者になれるかを教える教科書でもない。法生態学の範囲はあまりにも幅広く学際的だ。植物学、花粉学（花粉、胞子）、その他の微細な

もの（研究）、菌学（菌類の研究）、細菌学、昆虫学、寄生虫学、人間、動物、植物の生体構造の科学、土壌と堆積物の科学、統計学、その他数多くの「……学」の側面を含んでいる。大小含めたあらゆる生き物の構造、生活様式、分布だけでなく、それらが他の生き物も含めた物理的環境や化学的環境とどのような相互関係をもつかも、理解しなければならぬ。法生態学の研究は一生をかけた努力であり、正しい（この分野に絶対は存在しないから、十中八九正しい）結果を得るには、一種の勘に頼ることも多い。そうした感触は、自然界を全体として観察する経験と、実証科学を駆使して答えを見つけるという経験を何十年も積み重ねたうえで、はじめて得られるものだ。

だが、この本は死をテーマにした本でもない。

私は死体を見ても驚かない。私にとって、死体はもはや人間ではないのだ。それは自然がヒントを残した情報の宝庫であり、私たちはそのヒントをたどっていく必要がある。ただし、この仕事についてからほんの数回だけ、安置所の死体に心を動かされたことがあった。その一つは、二十二歳の娼婦が三人の子どもを残したまま森で遺体となって発見された事件だった。私が心から悲しいと思ったのは女性が死んでしまったことではなく、それまでにあまりにも大きな苦しみを受けてきたことだった。彼女は十六歳のとき両親に見捨てられ、その道に進まざるを得なかった。自分では気づかないうちにポン引きの言いなりになってしまい、その男は彼女を意図的にコカイン中毒にして、薬を手に入れるために働かざるを得なくした。もちろん男が食い扶持を得るためでもあった。彼女は三人の子を産み、いずれも父親は誰かわからなかったが、けっして子を見捨てることはなかった。その痩せこけてみすぼらしい小さな体は、かつて自分自身が育児放棄されていたことを物語っていたが、自らは子どもを

育てながら生きていくために娼婦の仕事が続けていた。遺体安置所のステンレスの台の上で衣服もつげずに冷たく横たわっているこの女性の姿を見て、私は泣いた。彼女が死んでしまったからではなかった。子どもたちを誠実に育てようとした彼女が、痛ましい生活の中で苦闘し、悲惨な状況に陥ってしまったからだ。私はそうした彼女に心を打たれた。

もう一つ、心を動かされたのは、北欧出身の十五歳の少女が殺された事件だった。彼女は遺体安置所の冷え冷えとした照明の下で、傷一つない体をさらしていた。のどかな夏の日に森の中で殺された少女は、一人の男の狂気じみた欲望のために、彼女の裸体を見ながら草むらにひざをつけて自慰行為をしたいという強迫観念のために、命を奪われてしまった。その無傷の体が深い悲しみを呼び起こしたのは、彼女がこれから生きるはずだった、生きなければならなかった、それなのにもう生きることのない人生を、思わずにはいなかったからだ。

私はこれまでにたびたび死を見つめてきた。あとから断片をつなげて人生の物語を組み立てようとしてきた人たちの死ばかりではなく、自分自身の愛する人たちの死にも直面してきたのだ。私は、いずれは誰もがそうなるように両親を失っているが、それより前に、心の準備が整わないまま、ほほ私を育ててくれたと言える祖母を失った。そしてまだ若いころには、娘が旅立った。まだ二歳にもなっていないかった。いまだに私の空想の中にいる娘は、マーガレット・タラントの絵本に描かれた小さな少女のようだ。晴れ晴れとした、完璧な少女の姿がそこにはある。だが私の「実際のな心」は、それがファンタジーであることを理解してもいる。私は自分自身も死に近いことを知っていて、それをありのままに見ている。ほとんど気にもとめず、冷静に、数多くの自然の作用の一つとして、どの

作用とも同じく不可解なものとして、受け入れている。

この本では、私が働いてきた世界への旅に出ると思ってほしい。私が案内人となって、自然と死が絡み合った魅力的な境界の世界に足を踏み入れていく。旅の途中で、ハートフォードシャーの生垣にも立ち寄ろう。そこで私は、犯罪捜査に植物が役立つ可能性にはじめて気づいた。それは自然界に対する、そして自然界がもつ新たな可能性に対する、私の学問的な見方が大きく変わった瞬間だった。

私はウジ虫がたかった死体といっしょに何時間でも事件現場にとどまり、テネシー州の「ボディー・ファーム（死体農場）」として知られる場所にも行ってきた。死体を自然にさらして腐敗させ、そこから多くを学べる研究施設だ。さらに、血に染まったカーペットとクッションのあるダンディーのアパートも訪ねる。そこには灰色と茶色のカビがびっしり生えていて、被害者が殺された時刻を特定する動かぬ証拠を提供してくれるだろう。鬱蒼とした森も、人気のない荒野も横切っていく。ラウンドアバウトに放置された死体も確認しよう。イングランド南部の中心で、幻覚を生み出す有毒植物を利用したシャーマンの儀式にも参加する。行方不明になり、二度と家族のもとに戻るのなかった多くの少女たちの死体遺棄現場にも検証に行く。その途中で、私自身の人生の旅路も振り返りたい。私が経験した愛と喪失に目を向け、自然界の不思議と幅広くに気づいたウェールズの小さな谷にも案内する。本の最後で、もしも植物、動物、微生物を見て私が感じる感嘆の念を少しでも伝えることができれば、そして私たち人間は自然から切り離されたものではなく、自然の中で生きているという新たな理解を残すことができれば、この仕事は成功したことになるだろう。

実際のところ、人間が自然界とどれだけ深くつながっているかをほんとうに理解している人はほと

んどいない。今では大半の人々が町や都市郊外に住んでいるかもしれないが、都会で暮らそうと、人里離れた田舎で暮らそうと、自然はあらゆる場所にある。地球上でこれまでに存在してきた種のなかで、人間が最も無残に自然を破壊してきたのが現実であるとはいえ、この惑星には私たちのほかに二十五万種以上の植物、三万五千種を超える哺乳類、鳥類、魚類、両生類、そして最新の推定ではおよそ五百万種にのぼる菌類、おそらく三千万種の昆虫がいる。このほかにも未知の微小な種が無数に存在することはさておき、法生態学ではこれらのすべてを考慮に入れる。人間の数は七十億人を超えているが、人間一人につき二億匹を超える昆虫が生きていることを考えれば、私たちが一歩進むごとに自然の痕跡がこの身に残されるとわかっていても驚きはないだろう。

昨今、世の中は監視社会だと言うのが流行のようだが、カメラがなくても人の動きを追跡する方法がある。私は靴についた微細な粒子から、その人がどんな場所に行ってきたかを言い当てられる。靴に付着した花粉を調べれば、どの道を通って帰宅したか——ブルーベルが咲いている林を抜けてきたのか、庭を横切ってきたのか——もわかる。恋人といっしょに長い時間を過ごした場所、待ち合わせをした野原の片隅、友達を待ちながら寄りかかった壁も、特定できるだろう。また運悪く死体となつて私の前に現れた人がいれば、皮膚や衣服に生えているカビを測定することで、また毛髪、衣服、靴についている花粉と胞子から、いつ、どこで、どのように死亡したかを家族に伝えることができるかもしれない。死体を遺棄現場まで運んだときに靴底の溝に埋まった花粉から、誰が犯人かを判断できる。鼻腔内を覆う薄膜から花粉、胞子、その他の粒子を回収して、被害者が生き埋めにされたかどうか、絞殺されるときに現場の地面の土を吸い込んだかどうかを見極められる。自然は私たちの体の中

にも外にも、あらゆるところに手がかりを残している。私たちは誰でも周囲の世界に痕跡を残しながら生きているが、周囲の世界もまた私たちに痕跡を残している。ときには手こずることがあっても、どこを見ればよいかを知っている人に、自然は必ず秘密を明かしてくれる。